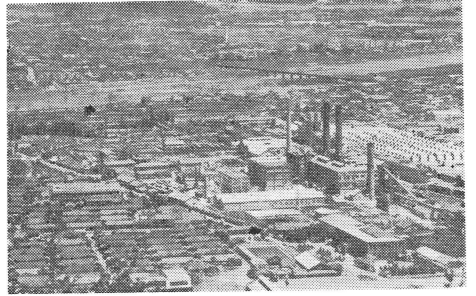


## 地方だより

## 延岡測候所



延岡測候所



工業都市延岡

延岡は明治の中頃から飛躍的に漁業が盛んになった所である。明治24年に延岡市土々呂の漁師日高亀市が「ぶり大敷網」を考案した。それまでは「まぎり」と呼ばれる一本釣に近い漁法が行われていたがこの大敷網は一網打尽の大量漁獲法で1日に5000尾から6000尾の水揚げがあったと記録ある。その後この漁法は日向灘から全九州へ、全国へと拡がり水産史上に新時代を築いた。

このようにして栄えた延岡の漁業は現在も、近海、遠洋に盛んであるが漁区の制限や資源の枯渇によって最近次第に水産加工、人工養殖の方向にも発展している。

このような水産事業の生産性の低下ともなつて気象に影響される度合いが高まるにつれて要望も強くなり、昭和22年に延岡市土々呂に測候所が創設された。しかし昭和24年には気象台の機構改革によって廃止された。その後も地元官民の熱心な設置運動が続けられ、昭和35年に再び測候所設置が決められた。

昭和36年4月に鉄筋コンクリート二階建の堅牢でスマートな庁舎が完成し、6月1日から気象業務を始めた。以前の測候所から北に10軒隔った延岡市の中心地で標高20米の丘の上であり、かつて当地方を領有していた内藤藩主の屋敷跡である。位置も標高も以前と異っているので新設官署として統計も新しく始めている。

測候所が開設されるとともに各方面からの要望や協力要請が殺到しているが新設官署のみが持つ不便や悩みを克服しながら協力を努力している。土々呂および県北最

大の漁港島野浦の海岸局を通して1400隻におよぶ漁船に対して漁業無線気象通報をおこなっている。

延岡には五箇瀬川、大瀬川、北川、祝子川の四河川が流れこみ市内で合流して日向灘に注いでいる。風光明媚な水郷であるがこれ等河川が常に市民に水害の脅威をあたえている。近くは昭和36年10月26日に大分県境に500耗の降雨があり、北川下流が氾濫し、堤防が決壊して2500ヘクタールが浸水し、500世帯が罹災した。これら河川の防災業務が当所の最大の課題である。

昨年5月に五箇瀬川上流にあった高千穂気象通報所が延岡測候所に併設されたため流域雨量が直接入電するようになり利用価値は倍加し防災対策は一步前進したが管理の点でやや不便になった。

これらの豊富な水資源を利用した近代科学工業が河口一帯に発達している。旭化成の六つの工場で食品、薬品、ペンベルグ、ダイナマイト、火薬、雷管等の生産を誇っており、関連産業も多種にわたっている。市の人口の2分の1は旭化成の従業員およびその家族で占めており、また市内平野部の4分の1の面積は工場敷地である。延岡市の盛衰は旭化成の況、不況によって左右される程である。昨年は隣接の日向、細島地区を含めて新産業都市に指定されてますます今後の発展が期待されている。これら工場も以前は測候所なみの観測施設を備えていたが現在では全面的に測候所に依存している。

工業都市として栄えてきた当市も一方において農村地区に対する諸施策を行なわねばならない田園都市としての特異性を持っている。

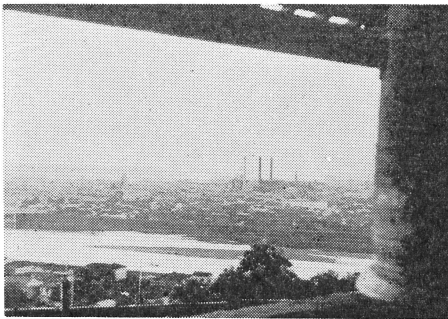
昭和39年度から新規事業として農業気象観測が始められることになった。暖い地方における農業気象観測は当地方がはじめてであり、その成果が各方面から注目されている。

なつかしき城山の鐘鳴りいでぬ

おさなかりし日聞きしごとくに

と若山牧水が詠んだ鐘の音を今なお朝に夕にききつつ、水郷の空にたくましく立ち昇る紫煙黒煙を眺め、次第に拡充されていく気象事業に生き甲斐を感じファイトを燃やしている。

(大籠信雄記)



「城山の鐘」から大瀬川を望む